



機関紙

一水会

No.11
『冬号』

発行日/2018年12月1日

発行人/小川 游

編集責任者/さきやあきら

発行/一水会事務局

〒192-0364

東京都八王子市

南大沢2-224-3-502

玉虫良次方

Tel.042(674)6922

<http://www.issuikai.org/>

題字/有島 生馬

第80回記念一水会展 特別企画

「もう一度見たい、一水会80年の画家たち」

九月二十二日、特別展示室で吉崎道治先生に懐かしいお話と共に、「一水会への「思い」を語って頂きました。

中村琢二先生は色を非常に大切になさいました。キャンバスを小さく切って好きな色があつたら、塗ってためていらした。妙義山の絵は写生ですよ、現場で二日程描いていらつしやる。人物の場合は制作している。写生と制作は大事だと、違ふという事を皆さん、覚えて欲しいと思う。



吉崎 道治 先生

尾崎正章先生は自分で船持っていて、船の絵をよく描くんだけどね、人物でもすごくいい絵がある

中谷龍一先生は、非常に洒落て、若い頃は小磯良平先生につき、宝塚の背景を描いてたんだよね。一水会にしては珍しい、詩情のある絵だな。非常にいい先生だった。

小林哲夫先生は、パステル描かせると上手い人だったよ。現代パステル協会作った人じゃないかな。後になって心象的な風景を描いた。僕は好きだったけどね。

高田誠先生とはね、一緒にスケッチを描いたことがあるの。右の風景画はね、おそらく若い時の絵。非常に色がいいでしょ。絵が点描になられてから一緒に写生しましたが、僕が10号を描きあげた時に先生は色鉛筆で10号のスケッチブックを広げてね、細かくくね、僕が油で描くの、先生が色鉛筆で描き終わるのと同じ。その位一所懸命丁寧に描いていて単純化なさってた。やっぱり、安井門下だったんだね。単純化して自分のフォルムを出してく。安井先生は「もう、変化、変化、変化。変化の一語に尽きるんだ。」って仰った。今の人の絵、人物は人物、バックはバックで描くからね、もう切り方おんなじ。貼り絵みたい。心で描いてくれよな。あのね、絵の説明はいらんないの。林檎剥いたって美味くないよなあ!

(西真里子記)

絵の細かい事はいらないと。一水会の人ね、写真を再現して、技術的に上手いけれど、それから先、表現しなきゃ、自分のものを。そこが言いたくて今日は出て来た。

木村辰彦先生は安井曾太郎門下ですけどね、よく調子の見える先生、空気を描いている、物を説明していない。今の人はそこまでの空気を描いていない。いい先生だった。昔の先生方は本当に心から絵が好きで写生してたんだね。今の方達ね、何かインパクトの強いものを描いて目立って賞でも取ろうという考えだ。

奥田憲三先生。人物画描いてるでしょ。後に、畑なんか描かれた先生だけだね。ヨーロッパの絵を描かせるとうまかった。あれも写真じゃないな、自分のものを表現している。そこを言いたかった。この部屋に来ると写真じゃないんだよ。

深沢紅子先生はね、審査の時に一水会って所は男の会よね、ダメよねって言うておられた。優しい先生だった。野の花など、常に写生をされていて。おつ、西さんあなた門下生だろ? 「五人の子育てをしながら時間を見つけて、と。懐かしくて涙が出そうです。」(西)そうだよなあ。詩人だよなあ!

(西真里子記)

藤島奨先生はね、俳優の池部良のお父さんで一水会にいた池部釣先生の最後の弟子だよ。風景は珍しいなと思う、ヨーロッパ行ったのは知ってましたけどね。人物を描かれると、釣さんみたいに飄々としたものがあつた。

高田誠先生とはね、一緒にスケッチを描いたことがあるの。右の風景画はね、おそらく若い時の絵。非常に色がいいでしょ。絵が点描になられてから一緒に写生しましたが、僕が10号を描きあげた時に先生は色鉛筆で10号のスケッチブックを広げてね、細かくくね、僕が油で描くの、先生が色鉛筆で描き終わるのと同じ。その位一所懸命丁寧に描いていて単純化なさってた。やっぱり、安井門下だったんだね。単純化して自分のフォルムを出してく。安井先生は「もう、変化、変化、変化。変化の一語に尽きるんだ。」って仰った。今の人の絵、人物は人物、バックはバックで描くからね、もう切り方おんなじ。貼り絵みたい。心で描いてくれよな。あのね、絵の説明はいらんないの。林檎剥いたって美味くないよなあ!

高田誠先生とはね、一緒にスケッチを描いたことがあるの。右の風景画はね、おそらく若い時の絵。非常に色がいいでしょ。絵が点描になられてから一緒に写生しましたが、僕が10号を描きあげた時に先生は色鉛筆で10号のスケッチブックを広げてね、細かくくね、僕が油で描くの、先生が色鉛筆で描き終わるのと同じ。その位一所懸命丁寧に描いていて単純化なさってた。やっぱり、安井門下だったんだね。単純化して自分のフォルムを出してく。安井先生は「もう、変化、変化、変化。変化の一語に尽きるんだ。」って仰った。今の人の絵、人物は人物、バックはバックで描くからね、もう切り方おんなじ。貼り絵みたい。心で描いてくれよな。あのね、絵の説明はいらんないの。林檎剥いたって美味くないよなあ!

高田誠先生とはね、一緒にスケッチを描いたことがあるの。右の風景画はね、おそらく若い時の絵。非常に色がいいでしょ。絵が点描になられてから一緒に写生しましたが、僕が10号を描きあげた時に先生は色鉛筆で10号のスケッチブックを広げてね、細かくくね、僕が油で描くの、先生が色鉛筆で描き終わるのと同じ。その位一所懸命丁寧に描いていて単純化なさってた。やっぱり、安井門下だったんだね。単純化して自分のフォルムを出してく。安井先生は「もう、変化、変化、変化。変化の一語に尽きるんだ。」って仰った。今の人の絵、人物は人物、バックはバックで描くからね、もう切り方おんなじ。貼り絵みたい。心で描いてくれよな。あのね、絵の説明はいらんないの。林檎剥いたって美味くないよなあ!

(西真里子記)



ご来場の高田 誠 先生ご家族

特集 第80回記念一水会展

展 評



武藤 初雄

「二十一世紀に於ける選択」という文章が発表され数年が経過した。一水会はより一層の高みに向かって進んでいる。

一水会優賞の二人―山下審也「給食室の朝」はオーソドックスな写実作品、グレーのトーンが美しい。一方、保坂晶「宇宙の二点・石を積む」は、それとは違い作家性の強い作品、傾向の違う二作品が選ばれたことは象徴的であった。

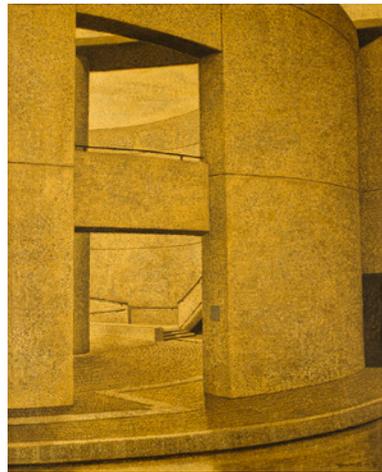
写実傾向の作品を見れば、広川明人「遠雷」、筆者が注目している作家。力作だ。同傾向では伊藤尚尋「樹々の聲 4 / 10」うまい作品だ、が、より深みへ進んで欲しい。写実傾向だが世界を広げて欲しい山本佳子「休日の展示室」、今回は構成に成功したとはいえないが、白の世界をもっと美しく見せて欲しい。

特別企画の部屋に入ると空気が

が変わる。先輩の先生方の個性と特徴がよくわかり、一水会の歴史を感じさせた。その、故藤島奨先生を思い起こさせる南井容子「白いテールクロス」、女性の顔、形、とらえ方も面白い。深いところで一水会の歴史を感じる。

一方、新人を見ると新入選・受賞の二人、中村恵美子「夏の日」水彩。白が美しい。熊本から入選、うれし。もうひとり林米子「工場」水彩、50号。二人ともクリーンヒット。

今回は50号に見るべき作品が、早川裕子「秋のせせらぎ」もそのひとつ。自然の美しさが伝わってくる。大作も見たい。少し別の視点で、九十才前後での元気な作品が何点も見られた。そのひとり、大江正弘「ミクロの



博物館にて 武藤 初雄

世界、顕微鏡でのぞいたカトリアの根の断面を描いた。年齢を感じさせないすごみを感じる。絵は年齢ではない証拠。一方の若い人では磯村千夏「融」。この人の絵はいつも見ている人を楽しみ気分させる。このノビノビ感は大切にして欲しい、そして大切にしたい。絵は何より作者の感動がものを云う。いつも思うことだが、地方の人はぜひ本展を見て欲しい。一水会は広いと感じさせるし、大きな刺激も受けるはずだ。

本格派、変化球、美しさ、テーマ、作家性、技法・技術。各自の想いをのせた制作を次に向かって励んで欲しい、私も励みたい。

新会員紹介



城 眞知子さん (埼玉)



熊谷 弥生さん (埼玉)



北 清志さん (石川)



加地 求さん (石川)



海部 洋さん (大阪)



山口 順子さん (石川)



安井 啓二さん (大阪)



宮崎 貴至さん (奈良)



日向野 惇さん (群馬)



武田 道弘さん (奈良)



菅沼 正則さん (愛知)



一水会優賞
給食室の朝 山下 審也



文部科学大臣賞
夜明けの噴水池の氷 笠井 隆良

受賞のことば

最近は何だか何?と自問しながら作品を描いています。

この度は一水会優賞を賜り、身に余る光栄と存じます。三・二の頃「人は宇宙の一点である」という言葉に出会い深い感銘を受けました。人はつくり、壊れては又つくる。大宇宙の中の極小の人間の営みを愛おしく思います。



保坂 晶さん
(埼玉)

一水会優賞

私も含めて総ての方がびっくりする大きな賞をいただきました。先生方、仲間の方々に感謝しています。車免許を持たなかった私は描くもの総て近隣です。毎日通る家から歩いて五分のユニバ公園の中。この時の数日、神戸ではめずらしく超寒い日が続き、寒さ苦手の私、早朝の寒い中を通いづめました。



笠井 隆良さん
(兵庫)

文部科学大臣賞

この度は、名誉ある賞を頂き誠にありがとうございます。受賞作は兵庫県猪名川町にある碎石工場です。この現場に三年以上通っています。季節により、この現場の空気感が違います。今も、その魅力に惹かれています。これからもドラマチックな作品を描いていきたいと思っています。



山本 正憲さん
(兵庫)

一水会優賞

四年前に給食室が新設されました。引越しが終り入らせていただくと、やや冷たい空気の中に、これから始まるだろう仕事に備えて器物達が静かに出番を待っている様でした。本年、これを大きなキャンバスに描く事にしました。
大変な名誉を与えていただき感謝感激です、ありがとうございます。



山下 審也さん
(兵庫)

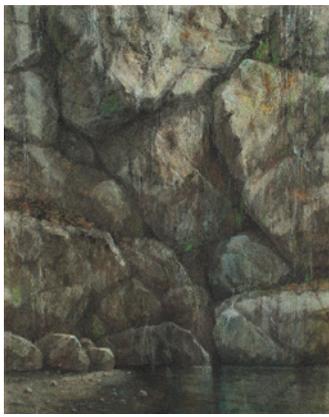
一水会優賞



一水会賞
砕石工場 II 山本 正憲



一水会優賞
宇宙の一点・石を積む 保坂 晶



損保ジャパン日本興亜美術財団賞
石舞台 II 井上 茂文



青い床 寺井カ三郎



桃を描く 池田 清明



回想のプレリュード 山名 将夫



窓辺の花 杉森 企観明



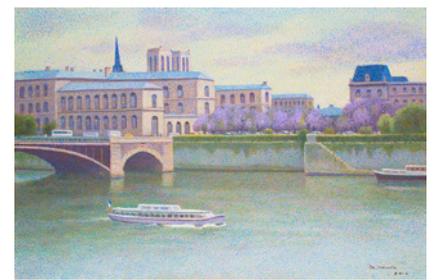
雪木立 上原 文丸



冬の水辺 鍵岡 太美子



石井柏亭奨励賞
草むらの花 鳥居 佳子



ジャカラング咲くシテ島の春・パリ 丹羽 章



こどもの情景 西 真里子



落葉 平井 芳夫



入江の朝 栗原 高光



遥 吉田 輝夫



一般佳作賞
工場 林 米子



栃本宿の夏 池田 賢子

- | | | | | | | | | | | | | |
|---|--|---|--|--|--|--|-----------------------------|---|--|--------------------------------|-----------------------------|--|
| <p>◎ 委員推挙
伊藤三千人、大地 純、栗原 高光、児島 真澄、芝 教純、田端 敏夫
長坂 千恵、中村 哲泰、広瀬 範 (以上九名)</p> <p>◎ 会員推挙
海部 洋、加地 求、北 清志、熊谷 弥生、城 眞知子、菅沼 正則
武田 道弘、日向野 惇、宮崎 貴至、安井 啓二、山口 順子 (以上十一名)</p> <p>◎ 准会員推挙
岩木 秀雄、川尻 澄江、久保田宗夫、小島 弘子、関口美和子、中村 博
原 元勝、藤 弘幸、藤村 寛、森 茂樹、柳沼知恵子 (以上十一名)</p> <p>◎ 会友推挙
青葉 信一、浅川 和哉、朝倉 紘一、安藤志津夫、池上 和樹、池田 正記
稲垣 道子、畝狭 鈴子、大島 一夫、岡崎 公輔、落合 英雄、小原 芳子
金佐 直、嘉納希代子、川村 信子、佐野 正弘、公文 典子、功野智恵子
小林尉之輔、五味 至、坂本 恵男、藤藤 素志、滝本 守、武田 恵子
富安 千、中川寿美子、西出 美奈、平藤 京子、藤原加奈子、三矢 利明
安岡さとみ、山本 正憲、吉本美栄子、米田 外美 (以上三十四名)</p> | <p>◎ 第80回展記念賞
伊藤三千人(神奈川県)
川尻 澄江(千葉)
栗原 高光(神奈川県)
芝 教純(富山)
中村 哲泰(北海道)
日向野 惇(群馬)
藤村 寛(山口)
安井 啓二(大阪)</p> | <p>◎ 新人賞
中尾知花子(石川)
田中久実子(神奈川県)</p> <p>◎ 日美賞
新 泰郎(石川)
岡 愛子(埼玉)
寺岡 克三(奈良)
林 米子(東京)
南井 容子(愛知)
伊藤三千人(神奈川県)
川尻 澄江(千葉)
栗原 高光(神奈川県)
芝 教純(富山)
中村 哲泰(北海道)
日向野 惇(群馬)
藤村 寛(山口)
安井 啓二(大阪)</p> | <p>◎ 一般佳作賞
新 泰郎(石川)
岡 愛子(埼玉)
寺岡 克三(奈良)
林 米子(東京)
南井 容子(愛知)
伊藤三千人(神奈川県)
川尻 澄江(千葉)
栗原 高光(神奈川県)
芝 教純(富山)
中村 哲泰(北海道)
日向野 惇(群馬)
藤村 寛(山口)
安井 啓二(大阪)</p> | <p>◎ 奨励賞
中山 孝美(群馬)
青柳由紀子(新潟)
佐竹美笑子(大阪)
樋谷 邦夫(広島)
中尾知花子(石川)
田中久実子(神奈川県)
新 泰郎(石川)
岡 愛子(埼玉)
寺岡 克三(奈良)
林 米子(東京)
南井 容子(愛知)
伊藤三千人(神奈川県)
川尻 澄江(千葉)
栗原 高光(神奈川県)
芝 教純(富山)
中村 哲泰(北海道)
日向野 惇(群馬)
藤村 寛(山口)
安井 啓二(大阪)</p> | <p>◎ 奨励賞
中山 孝美(群馬)
青柳由紀子(新潟)
佐竹美笑子(大阪)
樋谷 邦夫(広島)
中尾知花子(石川)
田中久実子(神奈川県)
新 泰郎(石川)
岡 愛子(埼玉)
寺岡 克三(奈良)
林 米子(東京)
南井 容子(愛知)
伊藤三千人(神奈川県)
川尻 澄江(千葉)
栗原 高光(神奈川県)
芝 教純(富山)
中村 哲泰(北海道)
日向野 惇(群馬)
藤村 寛(山口)
安井 啓二(大阪)</p> | <p>◎ 損保ジャパン日本興亜美術財団賞
井上 茂文(奈良)</p> | <p>◎ 一水会賞
山本 正憲(兵庫)</p> | <p>◎ 準会員賞(会員推挙)
松田 寧子(石川)
水谷 香織(東京)</p> | <p>◎ 会員佳作賞
久保 博孝(千葉)
吉田 輝夫(山形)
山下 審也(兵庫)
永谷 光隆(静岡)
平井由美子(奈良)</p> | <p>◎ 文部科学大臣賞
笠井 隆良(兵庫)</p> | <p>◎ 一水会優賞
保坂 晶琦(玉)</p> | <p>◎ 入賞者
山下 審也(兵庫)
永谷 光隆(静岡)
平井由美子(奈良)</p> |
|---|--|---|--|--|--|--|-----------------------------|---|--|--------------------------------|-----------------------------|--|

第2回新潟・群馬合同展

新潟県南魚沼市の池田記念美術館にて、五月十日から六月五日まで第2回一水会新潟・群馬合同展が開催されました。新緑の頃で多くの方にご来場頂きました。会期中には写生会と作品解説を行い、大勢の方に参加頂きました。作品解説では、来館された方々が真剣に解説に耳を傾けていました。

会期中の企画は、出品者と参加者の良いふれあいの場となりました。

新潟では一水会のような写真作品中心の展覧会が少ない中、今回展では多くの方に興味を持っていただけたようです。

(杉森企観明記)



小諸一水会展

市立小諸高原美術館・白鳥映雪館(長野県小諸市)
第一・第二展示室 四月十四日～六月三日



小沼秀夫、金井美智子、黒鳥正己、松澤泉次、若林邦弘の各氏。一人あたり130号～80号を五～三点、50号～10号を六～三点ずつ、総数四十六点で壮観でした。

ギャラリートークでは、廣畑先生が司会進行をされて、出品者一人一人の横顔と作画の背景について熱く語られ、それに応えて出品者も自作への想いを鑑賞者に伝えました。聴衆は次第に増えて一時間半後のトーク終了時には場内に拍手が響き渡りました。

(新井隆記)

小諸市街を見晴らす丘に立つ美術館は、小諸市出身の日本画家、白鳥映雪画伯の作品を多数収蔵し、その画業を讃えています。「小諸一水会展」は、同館の開館20周年記念企画展として開催されました。

間仕切りのない二室の会場は広さも充分で、小山敬三先生の油彩40号「浅間山風」(一九六六年作)が展示の中心に置かれました。小山先生は一水会創立会員で、小諸城址の懐古園内には『小山敬三美術館』と神奈川県茅ヶ崎市より移築復元されたアトリエがあります。

出品者は、廣畑正剛、中澤嘉文、



第4回四国一水会展

新居浜市あかがねミュージアム 六月三日〜十日



四国一水会展は、二〇一二年に始まり、2回目までを愛媛県で、3回目を高知県。今回、愛媛県に戻った。会場は、全面銅板葺きが目を引き、あかがねミュージアム内の新居浜市立美術館。

出品者は、愛媛十名、高知十一名、香川一名、計二十二名。今年、逝去された越智節昇、竹村文男、両先生の作品を中央に二十八点の大作が並んだ。

多くの鑑賞者が訪れ、力作を前に感嘆の声をあげていた。初日から盛会で、一五二名の入場者があった。隣室では、中村琢二先生の実兄、「中村研一展」が

開かれ、タイムリーであった。また、この展覧会に前後して愛媛、高知、両県とも勉強会を持ち、第80回一水会記念展に向けての作品を持ち寄り、広島島の久保田辰男先生の指導のもと、意見交換を踏まえて加筆しながら、意欲的な勉強会となっていた。

(木村毅記)



▲金井 美智子
花はそれを観る人の時どきの感情を映し出す。南天は母の想い出、牡丹は柔らかく優しく。花の中に自分の気持ちを込めていきたい。

▶松澤 泉次

骨董市で古い物を手に入れる。それらの持つ傷やいたみがある物の個性になる。それぞれが歩んだ時間、控え目な物の持つ存在感を描く。



◀廣畑 正剛
約400年前に戦没者を弔い、村人が植えた「くよと(供養塔)の桜」。その存在、樹齢に触れた時の感情を通して、俳句のように端的に対象の本質を表現したい。



▲黒鳥 正巳
浅間は先生が描いているからやめたほうが良いよと他人には言われるけれど、地元なので、私としてはどうしても描きたい。



▲中澤 嘉文
北海道・積丹の浜で休む船に魅力を感じた。現場で観た動き、ムーブメントに沿って視線を導くように配色し、構成する。

あのころこれから 《最終回》

小川 游 先生 訪問インタビュー

聞き手／新井 さきや 撮影／西



は三百三十六名入ってます。展示総数が七百九十一。

前の都美館のスペースでそれだけ、七百数十点を入れるとなるとね二段と三段と半々ぐらいただたかなあ。昔の偉い先生達が、まだ家族的な会の規模の時に「十年経ったら会員にしてやるうよ」って話し合いでやっていったんでしょ、最初の十年は十年かかったわけだけど、その翌年からはこんなに増えるのかわかっていうぐらいいくわけ。多い年は会員が十人も二十人も一挙に出てきて雪だるま式に無鑑査が増えちゃったっていうことですよ。で、受賞して会員になった人と、ただ年数だけで会員になれた人とは違いがあるんだけど、一緒なんだ。だから非常に目を覆うような情けない絵がいっぱいあったんですよ。心ある人たちは、例えば広瀬功さんだとかね、口を開くと「高田先生、何とかしてくださいよ」ってわけ。今の会員の状態は情けないという話が何かの席で必ず出た。小松崎邦雄さんなんかもね、「ニコニコしていたけど、「さあ

つ、どうなりますか」なんて感じだね。何とかしなくちゃって言うことがずうっと言われ続けていて、高田誠先生が思い切って大改革をやった。先生は「僕がやらなけりや他の人にはできなからう」って言ってましたよ。確かに高田先生だからこそ出来たことですね。だから他の会の人も凄いなあって評価した。ただそれがそういう評価だけならいいんだけど、それで煽りを食っちゃった人たち、力がありながら会友に落とされた人などは、猛烈に自分の所属している先生を突き上げて、抱えている人たちの手前、自分自身も会を辞めざるを得ないような、苦境に立った幹部の先生もちらほら出て、僕が事務所受けた時なんかまだ混乱の真つただ中でした。高田先生は亡くなる前にね、「五年間我慢してもらおう、五年経ったら力のある人は元に戻せるような、そのための取り決めをしよう」と言っていましたよ。五年の間にきちんとした規約を作ろうと思つたんでしょ。しかしそれを果たせぬまま先生は亡くなられたんだ。身体を悪くされちゃつて。先生のご臨終に立ち会つたんですけどね。手握つてね、「うまくやれ」って聞き取れないようなかすれた声でね、それが最期のことばだったですよ。うまくやれって言うことがどういうことなのか

色々考えましたけどね。
高田先生が大きく変えたわけですけど、当時の会員にはあらかじめ周知されたんですか？

懇親会のときに「今考えていることがあるから、相当一水会の形が変わることになるから」という予告めいた話をちらつとされたですよ。まあね、僕や川村親光さんなどは電車で先生と行き帰り一緒だったでしょ、「会員と会友だけに分けようかな」という話は聞かされてましたよ。僕らも会友になつてしまふのかなと思つたね。そしたら「委員は会員にすると。そして今の会員は会友に。だから会員の人ですよシヨクだったのは。会員の中のしかも力があつて当然会員になつた人も、そうじゃない年数だけになった人と一緒におとされちゃつたでしょ、そのところですよ、難しいのは。

改革の方向に賛成だった人もかなりおられた。

うん、いましたよそりゃ。渡辺祐一郎先生とかね。「これで一水会も贅肉取れたつて。プロの団体なんだからなあ！」つて喜んでましたよ。それで展覧会が締まつたですもん。変な絵がなくてしっかりした絵だけになつてきたからね。

総数は減りましたか？

うーん、やつぱり減りましたね。年々、辞めてつちやつて。だけ

「あのころこれから」シリーズ最終回として、一九八九年五十一回展時の改革（一水会定款十二ページ参照）直後より今日まで重責を担って来られた小川先生に、あの改革の意義と、それにより得られた、安定した新しい一水会について、ご苦労話など交えながらお話しただければと思います。

うんだけど、今そういう形になりましたよ確かにね。だけど、改革前は逆だったんだそれが。鏡餅を逆に乗せたように頭でっかちで。一般の入選者っていうのは四十%ぐらいいやなかつたのかなあ。

50回展では会員が三百四十八、委員が六十七、常任委員が三十六、運営委員が四、合計で四百五十五名が無鑑査で、一般

僕は例えにピラミッド型と言



日本美術商事株式会社作業場 壁には先代社長 星谷 善男氏ご夫妻の肖像写真

「うん。星谷さんがあんなに立派な社長だとは知らなかったとき、150号

の絵を金沢へ運ぶ途中、画面がちょっと傷つけられちゃったんですよ。金沢の奥田憲三さんから僕に電話が来てそれで飛んで行ったんですよ。そしたらね、ホシヤの社員が「先生の絵、段ボールに貼り付いちゃって、うまく取ろうとしたんだけど絵の具と一緒に取れちゃった」って。謝ってるからしよがないなって思ってたね。ただ、「社員にだけ謝らせて、なんで社長が謝ってこないんだ」って、その時僕はいくらか怒って言ったんだ。橋本さんが、社長が申し訳なかったって言うてるから勘弁して下さいって家まで来て。もうそれだけ言ってもらえれば結構だよって話したけど。実際こっちが困ったときには、「いいよお、儲けはあとの楽しみに取っておくから一水会は最低必要経費だけでやらしてもらおうから、もう大丈夫だってなったら言ってくれって。それで、急遽、記名料の新設導入、年会費・出品料のアップ、それでやっと息をつけるようになったんでね。

「一水会はよくやったと言われた。そうそう。ただね、そう口では言うけどあと大変だぞって言うのはあったと思いますよ。こりや見ものだぞ、どうなることか拝見してますよってという感じが見ええなかった。」

「定款」についてのお話を。

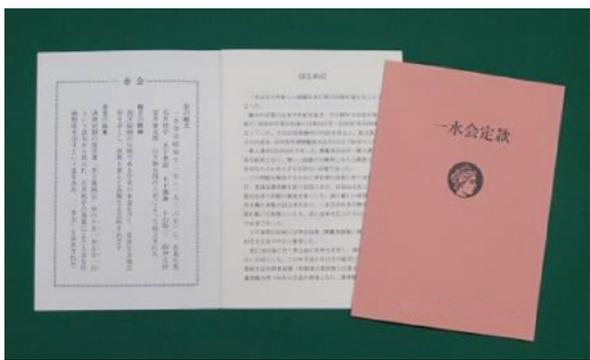
定款作りは協議委員(改革後の体制づくりをする幹部会員)とは違うメンバーでプロジェクトチームを作って56回展からかな。顔ぶれは、本山唯雄さん、川村親光さん、寺井力三郎さん、吉崎道治さん、田中義昭さん、菱田義宣さん、僕。プロジェクトチームを作るなんていうと警戒されましたよ。「何しでかすんだこいつらは」って。「先生、委員制を復活させるには、きちつとした規約作らなくちゃならない、それを眼目にやるんだ」って言ったら、「ああそれならいいから大いにやれ」って。「ただ、定款ができたらすぐ解散しろ」って。そうだったですよ。

四年後には協議委員から運営委員に移って行きました。

長老たちもこの規約が出来たのを喜んだ。もう組織の形がぐらぐらしない、無鑑査になる基準を厳しく決めたでしょ、なかなかないように決めたからね。

会友に格下げになったなかで本当に実力のある方たちを選んでますよね、まず準会員という形で六十名。

それがね、第一段階の救済措置。それは定款ができる前だっ



一水会 定款

ど減つても良いんじゃないかって考えた。僕らは。ところが事務所受けてから困ったのは年会費だ。四百人くらいいた会員が一銭も出さなくなったでしょ、その頃二万円だか二万五千円だった、年会費がね。八百万円くらいそれ以前より減収になった、年間にね。困りましたよ、そりゃあ。どうしたもんかと思つてね。ホシヤ(現・日本美術商事)の社長さんに、払いたくても払えない状態だ」って言ったら「小川さんいいよ。人件費と材料費これだけはもらわなきゃ困るけど、タダじゃ社員雇えないからね。儲けはしばらく待ってやるから、

それまでに立て直しなさいよ」って言ってくれて本当に安くしてくれました。それは助かりましたね。あれがなけりゃやつてこれなかった。相談して良かったなと思つたね。ホシヤさんの玄関入ったところの壁に掲げてあった『町火消し、義理と人情と痩せ我慢』：その通りやつてくれた。ホシヤの前身は「れ組」という谷中の町火消しだったそうだよ。

あの頃は番頭に橋本さんがいて。

あの人は真面目でね。びつくりするくらい綿密にノートに記録して。だから翌年困つたことになると「橋本さん、去年どうだったつけ？」って訊くと「それはこういう風になりました」ってきちんと、蟻んこみみたいにちっちゃい字で綺麗に書いてある。凄い人だったな。

「スタッフもきびきび動いてましたね。号令かけて。」

「うん。星谷さんがあんなに立派な社長だとは知らなかったとき、150号

の絵を金沢へ運ぶ途中、画面がちょっと傷つけられちゃったんですよ。金沢の奥田憲三さんから僕に電話が来てそれで飛んで行ったんですよ。そしたらね、ホシヤの社員が「先生の絵、段ボールに貼り付いちゃって、うまく取ろうとしたんだけど絵の具と一緒に取れちゃった」って。謝ってるからしよがないなって思ってたね。ただ、「社員にだけ謝らせて、なんで社長が謝ってこないんだ」って、その時僕はいくらか怒って言ったんだ。橋本さんが、社長が申し訳なかったって言うてるから勘弁して下さいって家まで来て。もうそれだけ言ってもらえれば結構だよって話したけど。実際こっちが困ったときには、「いいよお、儲けはあとの楽しみに取っておくから一水会は最低必要経費だけでやらしてもらおうから、もう大丈夫だってなったら言ってくれって。それで、急遽、記名料の新設導入、年会費・出品料のアップ、それでやっと息をつけるようになったんでね。

たね。とりあえずはそういう人たちの不満をなだめなくちゃならない緊迫感があった。力が有りながら落とされてるこの人たちは何としても、待ってくれ待ってくれじゃないけない、早く名誉回復してやらなくちゃ。まあ準会員、準が無ければなお良かったけどな。

無鑑査会員という言葉も使われていたような気がしますが、昔の委員ですけれども、審査権のある会員と分けていたりして分かりにくかったです。

協議委員って言つたって会員で、委員じゃなかった。定款が出来てからですから、委員制復活できたのは。

委員の制度を長く生かしていかないと整然としなかったのでは。

すよね。足掛け六年ぐらいかけて定款を仕上げられているんですけど、その間に松本展が開かれる。

うん、松本展はね、井上デパートの丸抱えでね。あの井上社長よくやってくれたよ本当に。十五年やってくれたからなあ。佐藤道雄君が、そこで買い手がいたのに「恥ずかしいから嫌だ、僕は売らない」って。僕があとで「デパートに儲けさせてあげなくっちゃ駄目だろ」って言ったら「はあ、すみません」って。面白いんだよ彼は。彼の絵は欲しい人結構いるのね。金沢の方でも「その人には、あんまり嬉しいからあげちゃいました」って、そして、「金沢に行かせてくれ」って。その人に会いたかったんだよ。

55回展に準会員が六十名出てきて無鑑査会員になり、その翌年56回展で会員という形になりました。そして平成七年、57回展の時に定款が完成して、これを仕上げましたわけですね。それで委員制も復活したんですよ。

元々は家族的なところでやってきて、それが異常に偏ってしまった結果、最終的にこういう形ができて団体として整って行くかということですね。

安定した形が維持できるための規約というものを、しっかりと作ったうえでやって行かないと、そ

ういうことが起きてくるということ。絵描きはみんな規約づくりとかそういうことはどうでも良いんだから。いい絵描けばいいじゃないかって。僕だってそうですよ、事務所なんかやらなければこんな苦労しなかつたんだだけ。

まず規約をちゃんとしてそのうえで組織を立て直す。規約という発想は小川先生が？

そうですね。それはそうですね。まあ、普段の会話の中で、みんなとそういう話をしたから。

規約や定款では、言い回しや語尾の整合性など大変気を使っている、専門的になりますね。

文章語つてあるからね、こういうものには摩訶不思議な言い方があるんだよ。それが勉強になった。

この規約は生きていくというか、少しずつ生まれ変わっていく。

前文にも書いておいたけど、やはり融通無碍なところがないと駄目なんです。いくら良いと思っても、これでよしと思っても色々出てきますよ。玉虫君が指摘したようにね。「これじゃ何年かかっても会員になれない」ってね。確かにそう言われればそうですね。安定した形を維持しなきゃいけないってガードを固くしすぎたために、今度は動脈硬化を起こすということもある

わけだ。気楽な人の頭からはパツとそれが見えるわけだ。規約を作った側はもうこれを守らなくちゃってことがあるから見えなくなってる。ああそうだ！って気付かされることもある。だから推敲を重ねていく、悪いところは直していく。そういう柔軟性持ちながらやっていかないとね。ただ、それを変えていくときに組織を崩してしまうような変え方じゃ困るけど。元の木阿弥になつては困る。

改革によって得られた安定した新しい体制を維持して、さらに豊かに活動していくために何が大切でしょうか？

定款のルール通りにいくと、どうしてもまだ賞になりにくい人がいるでしょ、地味で。力はあるのに置いてけぼり食う人がいる。そういう人にスポーツを当てた賞の出し方、昇格の措置、それを時々やってかないといけないと思います。記念展の時の記念賞とか、準会員を作つたでしょ、ああいう措置とか。そうしないとお気の毒ですよやっぱ。

半世紀以上出してい



る方々がいますよ。なんで昇格しないのか。そういう人がいますよ、よく見るとね。

いつも候補の声はかかりますけど票が足りない人ですね。

そう、あれはやっぱ人脈の無さなんだよな。

人脈で有利に立つ人と、不利になつてしまふ人がいます。

一匹狼の人がね。だからそこをね。

反対に、それほど力は無く

二十代の頃、高校で講師をしていた七年間で唯一才能を認められた生徒に、十八年ぶりに偶然再会しました。その彼が映画監督になつていて、奈良の葛城つて言う所で、當麻寺なども使つて、映画を撮りたいと聞いて。僕の地元ですし、當麻寺とも接点があるし、映画は、絵描きさんが主人公なので、当然、絵に関するものが必要になる。それで何となく協力したほうがいいかなつて、三、四年前に始まりました。

で、脚本にも関わりながら、お寺との交渉や、地域との接点作り、ロケ地の選定などやっていくうちに、スポンサー集めまで。その流れでプロデューサーの立場になつてしまいました。

この映画は、出資者でなく、制作側に権利を残す新しい法律に則つて作つていて、地元も映画が有効に利用できるし、いずれは、

この人に注目⑩
弓手 研平さん

映画撮影中のひとコマ

も会員になるケースもあるかと思えますが。

うまくやっているとこのかたえ。なんでこんな賞にするんだっていつの、さらって行くように。投票の時などそういうところがどうしてもある。それもまた面白い二面でもあるけどね、やっぱり何といつても作品本位ですよ。作品抜きにやっちゃダメだ。

これから先、色々不安があるわけですけど、団体によっては審査の可否ラインを下げて水増しして大きくなり、それに乗り切って行くこうという状況もあります。一水会は入選ラインを下げていないように感じますが、小川先生は玉虫良次先生との対談(本誌10号)の中で、質を上げるためには審査を厳しくした方がいいということをお話しておられましたね。

うーん、厳しい面もね。何でもありだと、ちよつと僕なんかついていけないな。ある審査員が怒った時あったでしょ、「イラスト部門を作るなら別だけど、そうでなかったらこれを一水会に入れちゃおかしい」って熱弁揮った。悔しくてね。僕はあれは分る気がする。どっちかというところという彼の演説に共鳴したな。けどあれはその後ちよつと良い絵になってきてるな。取ってその方が良くなっていくケースは確かに多いですね、

その時は駄目でも。

それは嬉しかったな、その良くなってきたことは。ただね、凄くいいぞっていう評価で良い場所に飾ったのが、やたらつまらなくなつたのがあつたな。難しいな、そういうところは。

二〇一〇年に小川先生が代表になられ、その翌年、二度目の愛

証よこさないんだよな。個人の金じゃないんだから領収証貰わないと困るんだ。

教育委員会に寄付しました、子供たちに使ってくれと。

そうそう、良いことやったよ。

愛知県美術館での一水会展では、全員一律上限50号で出品。あれがいま50号もよく観ていこう



第80回記念一水会展(2018) 鎮魂の岬・オシャマツ F100

ということのき

っかけになつた

のではないかと

思います。

50号で揃えた

つていろいろ綺麗

でしたよ。大

作が主になつて

いるところで50

号つていろいろは

大変よね。50号

を奨励するんだ

だつたらそれだ

けで審査しない

と。中品だけで

120号つていう中に50号ぼつと入るとね、どうしてもいじめられていた感じがするから、それだけの部屋を作つてやる

ほうが優遇措置だと思ふ。中品の部屋つていろいろの堂々とあつ

たほうがきれいだと思う。描いた人も嬉しかろうと思ふよ。名

古屋の並べ方は綺麗だったじゃないですか、みんな中品だから。

評判良かったですね。会の外部からも好意的な意見が聞かれました。いま先生が指摘された

観点、とても大事だと思います。出品している一人一人が主役にな

る、その人達が満足するような展示の仕方。

そうそう、描いた人がね、元気が出る、そういう並べ方してやつ

た方がいいな。100号を体力的にもう描けなくなつて、50号な

ら出せるつてそれで出してる人

何人かいますしね。会はそのう

う人たちのために、尽くしてく

れてるなあというのを実感して

もらうようにね。

「二十一世紀における選択」

で、時代に即した写実の柔軟な

解釈が必要で、一水会も新しい

写実を探し出して奨励していく

立場に立つべきだということ

全国の学校に無償で上映してもらえようと思つています。ものを創るつてどうい

うことかとか、絵を描くこと、歴史の中で残つたものつて、なぜ残つて

きたのかとか、そういつたところが

が大変たくさん入つてくる映画

なので。

上映のハードルの高い有楽町

スバル座で来年一月十九日から

の上映にこぎつけたんですけ

ど、そこでの成功が、その後の展

開の試金石となるので、一水会

の後援は大変ありがたいこと

です。是非、見に来てください。

学生時代、前衛のまつただ中

で嫌気がさして、一水会に出品

し始めました。茫洋とした前衛

と違つて、一水会にはずっとブレ

ない軸があります。同じように

ブレたくない僕にはそれが心地

よい。一水会は、ブレずにしつ

せました。が、一水会は八十年の間、頑なに写真、手で描くということ、それから丁寧に観察して想いを籠めること、そういう立場をずっと貫いてきた。その結果、古ぼけてひとつも新しいことに取り組まない団体、というように誹りも受けたかもしれませんが、それが今では「一水会の強み」でもあると思います。

そういう頑固さがなくちゃ！ある意味でね。なんでもありじゃいけない。僕は「二十世紀における選択」の中で、ありきたりの自然主義的な描写だけに縛られていたら駄目だっていうことは確かに言った。それで、抽象に近かるうが何だろうが、精神として真実なものを求めていけば写真の中に入れてもいいんじゃないかって、それは今も変わらない。しかし、何でもありっていうんだったら、一水会の良さも何もすつ飛んじやうと思う。格調高いものを目指してないと。

100号というのもそれなりの大作なので、会場芸術的な効果のようなものについてい気持ちは行くと思うんですよ。それを一水会は嫌ってきたわけですね。もっと内面を大切に、精神性が重要なんだということ。

確かにその通りだね。一方、例えば作画のテーマが変わって行くような時に、その絵が審査する側にも見慣れない

し、作者もまだ十分に新しいテーマを描く技術がものになってないところがあり、トライする気持ちは分かるけど、二点並べてみると元の絵のほう安定していて審査員の手が拳がっつりまう。作者がチャレンジしているのは解っているけれども、審査の段階でそれを応援しきれない現実もあるということもおっしゃってました。

それはあるだろうな。冒険した絵を、前の絵の延長で描いた絵と一緒に出さない方がいいんじゃないかな。そうすると無難な方、というか安心して観られる方へ行きますよ。どうせ冒険するなら二点とも冒険した絵で出してくれた方がいい。ちよつと面白いなあっていうほうよりも安心できるほうに手が拳がるもんなあ。だけどこれ賞決めるときははかえって損だ。あつちの絵だったら賞候補になったのって、そういうのが時々ある。

随分傾向の違う二点が出品されて、片方を落として絞って見たら、残った方の作品が俄然良く見えてきて、賞に上がるというケースもある。

それもあるかもしれないな、確かに。

これからの審査ではその冒険を否定しないで、もっと大事に育てて行けるように、その人が何を目指しているのか、時には

審査を止めて話し合いもしたほうが良いと言っておられましたね、玉虫先生との対談で。

もう少しディスプレイはあつても良いと思うね。時間短縮するばかりじゃなくてね。少し時間かけても、そのために予備日があるんだから。後味の良い審査がしたいよ。してやられたっていうような後味の悪い審査じゃなくてね。

50号が増えてくるから50号をきちんと位置付ける必要があるということ。去年から50号の審査を100号とは別な場面で、時間帯を区切って分けてやっています。

その方が良いと思いますよ。60号も50号と一緒に良いんじゃないかな。

先生はもう、早く代表の座を降りたいとお聞きしましたが。

ああ、そうだよ。それさつきから言いたくてね。僕は若い世代を強く推す。もう80回展までやればいだろう、僕は。

「二十世紀における選択」の中に広報活動を盛んにして行くということ、「機関紙」というのはそのひとつでもあります。本誌についてのご感想は？

一水会がね、元気が出てきたのは機関紙の力がものすごく大きいと思う。だから感謝してます、有難う。本当に嬉しいですよ。とにかく大変だろうと思うよ

なあ、皆さんねえ。手当てもすっかり支給できればいいんだけど、まあ、ぎりぎりのところだなあ。この間の話し合いで決めたのが。本当によくやって頂いて申し訳ない。なかなか無いぞ、これだけの機関紙やってるのは。

元々は外部に向けてのもではなかったのですが、配り始めると外部の人も読むようになってきました。そうすると今度は反対の意見として、編集の方針が内向きじゃないかっていうようなことも言われ始めています。これからはちよつとそういう意見も聞いて行かなきゃいけないかなということに居ます。

なるほどね。外向きっていうのがどういふことなのかまだちよつと分かりませんが。

ああ、内向きで良いんじゃないの？中をしっかりとさせることが大事ですもの。うつむきは困るけどな、内向きはいいんだ。

有難うございました。お疲れの中、貴重なお話を伺えまして有難く思います。

うまいことやって下さい。

以上

「あのころこれから」最終回

二〇一八年六月十二日

さいたま市浦和区の小川 游先生アトリエにて

短信

五月十九日〜二十日、駒ヶ根高原で長野一水協主催のスケッチ会が開催されました。市川広美通信員から楽しい報告が届いております。



駒ヶ池より駒ヶ岳を望む

駒ヶ根高原は、高速自動車道からのアクセスもよく、二つのアルプス、川、池、多彩な樹木や古い建物が点在しています。

実施した二日間は天候にも恵まれ、澄んだ空気の中、参加した十八名は思い思いにスケッチを満喫することができました。

今年には埼玉県から委員の森敬介先生が参加して下さい、宿泊先のペンションで楽しい交流ができました。中村善策先生も生前、この場所を愛されて度々先生に足を運ばれたようです。

(市川広美記)

神奈川で人物デッサン会



五月二十九日より一週間、第40回記念神奈川一水会作家展を「横浜市民ギャラリーあざみ野」で開催しました。
記念展のイベントとして、初めて人物デッサン会を開催しました。

会期中の六月二日、プロのモデルを会費無料で描けるということで一般参加を募りましたところ、定員の二十五名が集まりました。
鍵主恭夫、菊地洋二の両講師を招き、初めにデッサン棒として竹ヒゴを配り、各部の比例の取り方など実演し、その後、各自思い思いに、鉛筆、木炭、水彩などで、二十分ポーズを六回挑戦。一人一人に丁寧な指導もあり、有意義なデッサン会であったと思います。
展覧会は、一階会場に過去の一水会出品作や思い出の作品などを展示、二階会場には新作を並べて各自二点ずつ、四十二名が参加しました。入場者は約千百名でした。



人々に感動を与えられるような作品づくりに、努力して参りたいと思います。
(三好典子記)

第16回 一水会精鋭展

会期:2019年3月11日(月)~17日(日)
会場:メルサ2・7階 東京銀座画廊・美術館

※優秀作品には賞を贈る

出品予定作家

青木年広	青柳由紀子	朝倉 紘一	新井 隆	荒木 恵子	池田 賢子	池田竜太郎	市川 広美	今城 俊雄
岡 愛子	小笠原あい子	岡山 豊樹	小沼 秀夫	海部 洋	鍵岡太美子	加曾利光男	金井美智子	河石 正義
川尻 澄江	木村 毅	久世 夢二	久保 慶議	久保 博孝	久保多貞夫	熊谷 弥生	児島 真澄	小林 正博
小松 正弘	五味 至	斎藤由美子	才村 啓	芝 教純	柴田百合子	城 真知子	神宮紀勢子	鈴木 喜博
須田泰一郎	関口 昭夫	相馬 順子	高崎 高嗣	滝沢美恵子	田中久実子	田村 公男	玉上 佑子	茶本 良隆
土田佳代子	樋谷 邦夫	戸苅 武宏	鳥居 佳子	中尾知花子	中村 裕二	中山 一昭	中山 孝美	永谷 光隆
西 真里子	西滝 直人	島山 正枝	服部 則子	林 米子	平井 芳夫	広川 明人	藤原加奈子	保坂 晶
増田 敏郎	間瀬 徹	松田美和子	宮崎 貴至	宮島百合子	三好 典子	三輪由紀子	森 恵美子	山下 審也
山本 正憲	山本 佳子	弓手 文乃	李 志宏	渡邊 道男				

第58回 一水会選抜展

会期:2019年3月6日(水)~11日(月)
会場:日本橋三越本店 本館6階・美術特選画廊

出品予定作家

小川 游	寺井力三郎	田中 義昭	浅見 嘉正	辰巳 文一	鈴木 益躬	さきやあきら	久保田辰男	武藤 初雄
佐藤 道雄	山名 将夫	田島 健次	浅見 玉虫	鈴木 順一	山本 勇	山本 耕造	廣畑 正剛	山田 正博
斉藤 薫子	池田 清明	浅見 文紀	丹羽 章	一の瀬 洋	遠藤 博政	中澤 嘉文	杉森企観明	平井 利明
弓手 研平	宇野のり子	上原 文丸	笠井 隆良	鍵主 恭夫	松下 久信	荒蒔 邦弘	茅野 吉孝	岡野 信子
新井 隆	重石 晃子	勝谷 明男	河西 昭治	杉田 公子	相馬 順子	西 真里子	森 敬介	青木 年広
酒井 昌之	滝沢美恵子	茶本 良隆	村上 選	栗原 高光	相馬 芝	西 真里子	森 敬介	青木 年広
山本 佳子	須貝 昌春	井上 茂文	長岡 正勝	松澤 泉次	芝 教純	長坂 千恵	広瀬 範	伊藤 尚尋

自由投稿欄

水路

揮毫 浅見嘉正

岐阜県・青木年広

新緑の四月二十四日から約一ヶ月半、岐阜市主催の回顧展が、風光明媚な長良川と金華山麓にある「加藤栄三・東一記念美術館」で盛大な開場式から開催されました。

私の高校時代から現在まで多くの作品から自選し展示されました。私の歩みを年代順に並べて流れも分かり好評で、たくさんの方に再認識されました。また、会期中の五月末には岐阜高島屋で15回目の「個展」も開催、両会場の作品を観て戴き大変賑わいました。

一水会展に二十八才から出品を始めて40回となりました。今回、自分を回顧して更なる作

品の制作に努めて生きたく思います。感謝。



長野県・竹田修一

昨年の九月二十三日、一水会展を観に上野へ出かけました。都美術館に自分の絵が展示されているのが不思議な感じでした。精養軒の懇親会では、五百人余りの出席者に度肝を抜かれました。

初挑戦だったので、入選はとても嬉しい反面八十歳になってようやくのデビューは、嬉しさと同時に情けなさも混じった複雑な気持ちです。

子供の頃から絵を描く事は

好きでした。サラリーマン時代には描くことができず、それでも定年間近の名古屋勤めの時に中ビルの教室でデッサンを二年間勉強した後、故郷である長野に戻つてからはカルチャー教室で油絵の手ほどきを受けて、現在に至っています。

いずれにしても好きな道なので、北斎のように、歳をとつても進歩はあると信じて生涯続けたいと思います。

千葉県・田端敏夫

子供のころはよくプラモデルや工作など、物作りをした。常に完成には至らず途中で投げ出し、親に注意された。高校で初めて油彩を経験して、どのようにも思いのまま表現できる楽しさ、想像以上の満足、興奮、達成感を感じ、夢中になった。

一水会展への出品は十七歳で、丁度、昭和三十九年の東京オリンピック開催年から52回目になる。絵画の世界でも同じモチーフを根気よく描き続ける努力ができず、毎回新しいモチーフに挑戦し続けている。今回の作品は晩秋の妙義山を描いた。自宅は千葉県市川市ですが、郷里が群馬県で、妙義山の

魅力にひかれて十年ほど前にその麓にアトリエを設けた。大作に挑戦したのは二作目である。主にペインティングナイフで制作しておるせいか、岩肌を表現するには効果的だ。これからは腰をすえて、これが私の妙義山だと自信を持つて言えるような、そして皆様に感動して見て頂けるような絵を描きたい。

神奈川県・伊藤 三千人

長野県伊那市高遠町勝間は私の生まれ育った土地である。高遠は、東アルプスの仙丈岳と、西に中央アルプスの主峰西駒ヶ岳の三千m級の高山がそびえ、その間を天竜川の支流三峯川が流れ、それによって形成された岩山の上に築かれた高遠城の城下町である。ここから見る二つの秀峰は、周辺の里山や、段丘の家々を含めて、四季の色彩は鮮やかで絵の制作には最高である。高遠城址公園の桜は赤みが強く上品な花で高遠小彼岸桜と呼ばれており、数千本の大樹が、伊那特有の青空のもとに一斉に咲くさまは見事である。

私はこの桜を六十余年欠かすこと無く描いてきた倅せを持っている。生家が城跡から歩いて二

第4回 北海道出品者展

四月十七日～三十日

今年は道央、深川市で開きました。会場の「深川アートホール東洲館」は広々とした会場で、100号と50号交えて四十七点、初出品者が年々増え充実した展覧会となりました。

今年は特別展示として、大作六点による「取り残されたトーチカ・安藤志津夫展」を企画しました。トーチカは戦時中、国防のため作られた防陣地。安藤さんは近年の一水会展出品者で、長い年月思いを込めてトーチカを描き続けてきました。平和である現在をかみしめたいと思います。来年の5回展は「千歳市民ギャラリー」を予定しています。

(中村 哲泰 記)



取り残されたトーチカ 安藤志津夫

十分ほどで、毎日桜の写生に通えたからである。

桜が散れば杏、桃、梨、リンゴ等の花の背景に、白雪の仙丈岳や中央アルプスの美しい姿を求めて一ヶ月以上は滞在する。第19回一水会展初入選以来、六十年間の出品作の七割は高遠で、そのほとんどが仙丈岳を主題としている。生家から近くに仰ぐこの山の、四季の秀麗な姿に魅せられて絵を続けてこれたのである。

木下義謙先生、中村琢二先生も、勝間の風景を描いて残してくださった。第80回記念一水会展の記念賞の受賞作「高遠の春」は城址公園と中央アルプスである。

大阪府・茶本良隆

今年二月、兵庫県尼崎市にある尼信会館にて開催させて頂きました個展には、過去三十五年間に一水会、研水会などに出品した作品から三十点を選び展示しました。

師匠の故前田正夫先生の絵にあこがれて、古いもの、朽ちていくものに魅力を感じ、そのテーマを追い求めて、今日まで描いてきました。最初は廃棄され

た自転車、バイクを描いていましたが、千葉県を取材してからは廃船を求めては描き、今日に至っています。

一ヶ月の会期中多くの方々に観賞していただき、交流することができたことは大きな喜びであり、収穫でした。ご支援頂きました方々に心より感謝申し上げます。



兵庫県・山下審也

個展の会場となった尼信会館は自宅から数分の距離にある。まさに地元での開催となった。後押しをして下さった師匠の武藤初雄先生と尼崎信用金庫様のご厚意による企画展。身近にある普遍的な美しさを表



現したいと描きだした学校風景を中心に大作約三十点の展示となった。館長は、放課後の教室など静寂に包まれた空間が、ぬくもりのある灰色の色調で描かれているとアピール、新聞では、ポウルや鍋が置かれたままの「午後の給食室」や、階段の下に子どもたちが遊んだことを思わせる野球ボールが転がった「北の校舎」など生徒達の息遣いが感じられる作品が並ぶと紹介された。

教え子や児童、一水会、研水会の方や皆様や尼崎市長の訪問（写真）等々一八六一名の来館となり感謝と感動の四十日間。たくさんさんの思い出と妻と娘二人の笑顔を残して幕は閉じた。花を添えて下さった皆様ありがとうございました。

中仙道上松（長野県）

ねざめの床（浦島伝説）は白い切り立った岩と木曾川の深い緑の対比が面白い。宿の二階からバナナ下さいと叫び用意した紐をおろすと、向かいの八百屋の親父が籠に入れ結んでくれた。空籠にお金を入れて「ありがとうございます！」。昔、小泉元生先生と旅していた頃の話。今でもその宿の前を通ると想い出す。

南伊豆大瀬（静岡県）

常宿の親父様が私達の絵を見て岩の形が違おうと云う。なるほど漁師は岩や山を見て漁場を決めるそう。或る時露地栽培の花を入れて描いたら、「花は一本二本あれば良い」とぬかした。絵の見える方だった。蓑掛岩、法師岩、露地栽培の花も面白い、石廊崎に近い。休暇村弓ヶ浜があり楽しめる所。

西伊豆安良里（静岡県）

何時迄寝ているの！と布団をはがされた。朝食前に3号描くのが当然だった頃。伝馬

吉崎道治のちょっと道草⑥ 写生地いろいろ

船を借り海兵出身の小泉先生が櫓をとったが船は大きく廻るだけ！伝馬を覚えたのはこの港。高田誠先生は対岸から漁村を描かれている。中川一政、大津鎮雄、中村琢二の名作もある三方を山に囲まれた入江で、白い燈台も可愛い。最初に泊まった時二十才と記したが後に十九才と女将にばれた。夏のハマボウの花や冬の景色が最高の所。

三津浜（静岡県）

ミカンの頃に良く描いた。畑の方がミカンをくれたが、写生をしながら手をのばせばミカンがとれるので気になつて食べられない。海辺でいただいたミカンは甘露そのもの！海・ミカン・淡島・富士と色々描ける所。



一水会事務局だより

第80回記念一水会展は盛会のうちに終了しました。展示総数は七七七点、うち初入選は四十六点となりました。今年は天候に恵まれませんでした。入場者総数は昨年並みの一九二八六人と、一日平均二八五人の観客を動員することができました。

今回は「もう一度見たい、一水会80年の画家たち―その魅力と個性―」として、第50回展以降故人になられた十一名の画家の作品を展示しました。入選作品数が昨年とほぼ同数だったため、特別企画室以外の展示がどうしても苦しくなってしまうことは申し訳なく思っています。企画の趣旨は一水会をより知っていただくだけでなく、

まだ出品経験の浅い方々に、制作の奥深さなどを感じてもらえたらとの思いからでした。そのために画家の身近にいた先生方に解説文をお願いし、代表作を映像に編集しました。特別企画室では、画家たちのモチーフへの向かい方、技法の研究など作品の裏に

隠された膨大な時間の密度が伝わってきました。

四月に盛岡の「野の花美術館」で深沢紅子の今回出品作に初めて接しました。その確実な人物像の捉え方、瑞々しい横顔や手の表情に感動し、これは是非皆さんに見てもらいたい、今回の企画の意義を再確認しました。

この展示室では一作一作物語を感じました。

若い頃の高田誠の形への力強いこだわり、奥田憲三の自画像の様な眼差し、中谷龍一の洒落た色面、木村辰彦の澄み渡る青い室内、広瀬功の家族への温かい視線、中畑艸人の小さくても筋肉と骨がある駱駝。中村琢二の作品を画像に取り込んでいて分かったのですが、明暗の調子の実に細やかな事、藤島奨の欧州への憧れ、小林哲夫の幅広い思想観。

本展終了後に作品を借りたお礼に周南市の尾崎正章記念館に伺い、再現されたアトリエを見学しました。数多くの使い込まれた大きいペインティン

グナイフや様々なメーカーのホワイトの研究、下図に引いた構成の線を見て、襟を正しました。皆さんも、ここで実作に触れた時の気持ちをご自身の制作に活かしていただけたらと思います。(敬称は略させていただきます)

(玉虫良次記)

最近の動静

【逝去】山名 将夫(運営委員)、竹内 徹(常任委員) 謹んでご冥福をお祈りいたします。

【退会】山中英彦(会員)

日展審査を終えて



一水会からは四十一名の方が入選されました。日展の審査は、第一審を通った作品の中から、第二審で投票数によってA、B、Cとランク付けされます。今年の傾向としては、Aランクの作品が非常に多く、Bランクからの選出が難しい状態でした。

一水会の絵の特徴は、丁寧な質の良い画作です。そのレベルの高さから、第一審を通過する作品は数多

くあります。そこから入選するためには、しっかりと構成を考え、長い準備期間を設け、一水会らしさを活かし、「自分らしい絵」を表現していくことが大事です。

今回、二回目の特選を受賞された一の瀨洋先生の絵は、今までの中でも特に目を惹く素晴らしい作品でした。

重きを置いて絵に

《巡回展の搬出》
80回展の受賞者で巡回展出品の方はお手配お願いします。
【場所】日本美術商事(日美倉庫 千二〇一〇〇〇二台東区上野桜木二一八七 〇三(三八二二)三八五四

2019年の展覧会スケジュール

- 第58回一水会選抜展
三月六日〜十一日
- 【於】日本橋三越本店
- 本館六階・美術特選画廊
- 運営委員・常任委員と選抜された委員、会員、会友、一般出品者が出品。
- 第16回一水会精鋭展
三月十二日〜十七日
- 【於】メルサ2・七階
- 東京銀座画廊・美術館
- 「第80回記念一水会展」に
- て選出された80名による、50号大の作品を展示。
- 盛岡展
三月二十八日〜四月十四日
- 【於】深沢紅子野の花美術館
- 「第58回選抜展」より、運営委員、常任委員に加え、会場で選抜された作品。
- 第81回一水会展
九月十九日〜十月五日
- 【於】東京都美術館



高原の冬 一の瀨 洋

取り組む事により、一層深みのある作品が生まれます。日々、挑戦の志と姿勢が、一水会の更なる飛躍に繋がっていくのではないのでしょうか。(鈴木順一記)

編集後記



機関紙も繰り返し返して続けていると、語り口や話題の取り上げ方に「型」が生じてきます。一般紙ならば人気なければ廃刊ですが、機関紙の場合は別です。本当にこれでもいいのだらうかと自問自答しながら続けています。皆様からのご意見、アイデアが頼りです。紙面の充実に社交辞令は無用です。気軽にお声をかけてください。(MK)

大改革後の混乱の中で『定款』作りが始まる。本会の良き伝統である「家族的」な側面と、社会的に開かれた「公募団体」という在り方、相容れないようなその両極を見据えて、集団としての形を模索し整えて行く。その作業に携わられた先生方のご苦労を思う。規約の一項目ごとに籠められた見識と英知、会史の一行の中に垣間見る先達の方々の行動と決断。小川代表の談話を伺ううちに、『定款』が、単なる規則ではないことを知る。(AT)